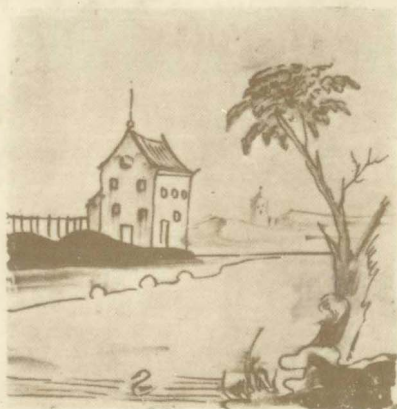


早春

三潤野庄



早春

三潤野庄



中央公論社

早春

定価一六〇〇円

昭和五十七年一月二十日初版
昭和五十七年三月二十日四版

著者 庄野潤三

発行者 高梨 茂

印刷 精興社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二二三四

©一九八二 検印廃止

早春

紫いろのビロードの表紙の、背に「小夜曲」、表は SERENADE YUMEZI TAKEHISA。その下の空間を埋めるチュールリップとも木蓮とも見える花の図案の組み合わせも、すべてくすんだ金の箔押し。竹久夢二作・恩地孝装幀、絵入詩集『小夜曲』（せれなあと、と本文の扉にはルビが振ってある）大正四年新潮社版。

いったいにロマンチックな性情に欠ける私のような人間のところに（それを私は近頃になって物足りなく思うようになってはいるのだが）この可憐な本が所蔵されているのを訝しく思う人がいたとしても不思議ではない。もしかりに背の部分のビロードが茶色に変ったこの小型の詩集がわが手に渡った日のことをすっかり忘れてしまっていたとしたら、誰よりも私自身が驚き、怪しんだに違いないから。ところで、これは私が古本屋の本棚から見つけ出したものではない。いまから四十年近い昔、大阪外語の英語部で同じクラスにいた神戸の太地一郎が予備学生として海軍

歌があったのを思い出す）こうして二学期になって三ヵ月ぶりに登校した時、活気のあった教室には大学進学その他の事情から授業を続けることになった数人が残っているだけで、英語部三年のクラスは消滅したのも同じ状態になった。私が海軍軍令部から休暇を得て神戸へ帰って来た太地と会ったのは、そういう時期であった。

もし太地が戦死していたら、この詩集は貴重なかたみの品として私の手許に残ったわけだが、幸いそうならなかった。海軍から復員した彼が新聞社に入ったのを知ったのはいつ頃だろう。お互いに生存を確かめ合う葉書のやり取りはあったに違いないのだが、それも覚えてはいない。戦後、七、八年たった頃、大阪中之島の民間放送の会社にいた私が、堂島にある太地の勤め先の新聞社へ訪ねて行ったことがあるが、生憎、仕事で外へ出ていて、会えなかった。まだすっかり生活が落着いたとはいえず、繰合せて会う段取りをつけようという気持ちにもなり難い時代であった。

ところが、近頃になって（その最初がいつであったかはっきり思い出せない）神戸の太地から時々、便りが届くようになった。その中にはこのところ三人の、それぞれ文学歴の古い女流作家の随筆集を読む機会があり、三人三様の味わいを楽しんだというようなことから、街中の陋屋（という言葉を用いていた）の狭い庭にもいま何とかの花が咲きかけているというようなことまでしるされた封書の手紙もあった。

その途中で私たちの卒業以来初めてのクラス会が大阪中津のホテルで、九十二になってなお憂鬱とした恩師を迎えて開かれた。戦死した者も病気で亡くなった者もいるが、卒業した時の頭数

でいうと、ほぼ半数に当る十五名が顔を見せ、中華料理の二つの卓を囲んだ。太地も来るのではないかと私は楽しみにしていたが、社へ出なくてはいけない日とかで会えなかった。

その会の案内状には、

「……戦争のどさくさで散りぢりになり、上本町を離れてから三十七年、お互いに白いものが目立ちかける昨今となりました」

と書かれてあった。白いものが目立ちかけるというのは控え目な表現であるのは確かだが、あとは文字通り「戦争のどさくさで散りぢり」の別れかたをしたみんなである。最後に輪になって、一年の最初の授業で主幹の教授（この方は戦後早くに亡くなった）から教わった、われわれ英語部の歌ともいべきティペラリーを合唱した。

今年の正月に届いた太地の暫くぶりの葉書には、去年の秋、新聞社を定年で退職したという知らせのあとに、昔、教室で読んだガーディナーのフロー・トラヴェラーやドーバーの白いヒースの花がしきりに心に浮んで来るという意味のことが書かれてあった。やっと手に入れた閑暇をしみじみと味わっている様子が偲ばれる文面であった。

その葉書を受け取ってから後に、私は芦屋にいる今年の三月で八十五歳になる妻の叔父夫婦を訪ねる用事が出来た。十二月にも妻と一緒に会いに行つて、近くの店で焼き焼を食べて忘年会の代りにしたのだが、その折、春になったら四人で神戸へ一度行つてみようという話が出た。だが、暖くなるまでにまだ少し間があるので、その前に叔父が須磨で過した少年時代の思い出を聞かせて貰おうと思った。大阪鞆の鯉節問屋に生れた叔父は、お父さんが須磨に家を建ててからそちら

へ移り、やがて神戸一中に入学した。芦屋に世帯を持ったのは大正の末だから、大阪よりも神戸の方が詳しい。

そこで叔父夫婦の都合のいい日はいつとか電話で前もって尋ねておいてから、太地に手紙を出した。こちらの日程を知らせた上で、もし差支えが無かったら私たちが大阪に着く日の夕方、中之島の堂島川に面したホテルで一緒に食事をしながら積る話をしたい、もし神戸で会う方がよければそうしてもいい、また今回、都合がつかなければ次の機会に譲っても構わないというふうに書いた。

こちらは旧交を暖めたいと思っていても、人それぞれの考えかたがあるし、都合もある。いきなり会いたいといわれても当惑することだってある。面倒臭ければ遠慮なしにそういつて断ってくれてもいいというつもりであった。

太地から折返し封書の返事が届いた。

「ご丁重な書状を頂戴しまして恐縮です」

という書出しで始まる手紙に先ず、このたびのご来阪のスケジュールの中に私をお招き頂くとのこととたいへん嬉しく思っております、お申越しの二月十五日午後五時に大阪グランドホテルに向くことにしたいと存じますとあるのを読んだ時は、ほっとしたし、唐突な申し出にも拘らず、快くこれに応じてくれたことを何より有難く思った。私について行く妻も、それを聞いて喜んだ。

太地の手紙は、このあと、先頃の久しぶりの同窓会の集いには勤めのためとはいえ欠席をし

して、お集まりの皆さんにご無礼をしてしまったこと、あとで村木君（というのは前にいった陸軍参謀本部組の一人として南方へ行った友人だが）からは電話で一喝されたこと、世話人を引受けた畑野、松井両君からその時の写真を送ってくれ、皆さんそれぞれのことを偲びながら感慨無量のものがありましたと書かれていた。

また、この頃、戦争中、トラック島やニューブリテン島のラバウルに行った時期について纏めておきたいと思うようになり、同期の友人に対して学徒兵としてこの戦争に対する一つの証言にもなるわけだから何か書き残しておくように呼びかけていること、こんなことを思うようになったのは初老に入った故でしょうかとした後で、貴兄については作品を通じていろいろ承知しているし、新聞その他で写真を見る機会もあるので、久しぶりにお会いしてもそう驚くことは無いと思っていますが、私の方は貴兄が想像しておられるものとどう違っているかが心配ですとあった。

もっとも、これは私がいまは髪なんか大変心細い状態でさっぱりですと書いたのに対する挨拶でもあった。

「何れにしても、お目にかかる日を今から楽しみにしております。書状を頂いた日が丁度、節分でしたので、陋屋で豆撒きをし、来合せていた甲子園の弟と夕食に鰯を食べました。今日は立春、クロッカスの花も間もなく咲くでしょうが、余寒がつづきそうですから、どうぞ御家族の皆様、お風邪などひかれないうくれぐれもご留意下さい。それでは、その節万々。とりいそぎ、ご返事まで」

最後の行に、立春の日に、とあるのが何かしら幸先よい感じを与えてくれた。ところで終りの方に「甲子園の弟」という言葉が出て来たので、暫くの別れを惜むために太地が私を泊りがけで来るように呼んでくれたのが甲子園の家であったのは、これでどうやら間違いは無いと分った。しかも、その家が戦災にも会わずに残っているとは有難い。この弟さんというのは、あるいはわれと同じ外語の、フランス語かドイツ語の二年くらい下にいた方であるかも知れない。手紙を読んでふと一つの顔が浮んだから。

私はすぐ芦屋の叔父に手紙を出した。叔父からは次のような返事が届いた。

拝復 立春も過ぎたと云うのに何と寒い日々でしょうか。でも御健勝御活躍の程御喜び申し上げます。昨日は貴書拝見致しました。十六日御来宅下さいます由承知致しました。何時にても宜敷く御待ち致して居りますから御遠慮なく御越し下さいませ。先は今より愉しみにして居ります。

三年ほど前、昔の大阪の街なかの商家の日常生活を中心とした「水の都」という小説を書いた時、この叔父が随分力になってくれた。長年、商売ひと筋に生きて来た人だが、いまは好きな俳画と俳句を楽しみながら一日があまりに早く過ぎるのを歎くくらいだという。どちらも七十を過ぎてから習い始めたものだが、もともと素質があったのか、特に俳画の方は上達が早くて、先生につきながら頼まれた人に手ほどきをするまでになった。いまでは週に二回ばかり教えている。

俳句は二つの雑誌に投句を続けているらしい。それとは別に、西宮市で春秋二回、開かれる大会があって、その春の部で特選に入ったことがある。

靴の紐堅く結んで入学す

こういうのは頭でこしらえようと思っても出て来ない句ではないだろうか。自分の身内に当る人を賞めるのは差控えなくてはいけないが、この叔父は厳密にいうと（厳密でなくてもそうなるのだが）、私の妻の叔母、つまり母親の妹の連れあいに当る人だから、身内といっても少し離れている。もう一つだけ叔父の句を紹介したい。今年の年賀状に書いてあったものだから、きっと自作だろう。

元日や地球儀廻し日本見る

これも前の句と共通した趣がある。ついでに付け足すと、それより早く、十二月のはじめに郵便で送ってくれた色紙は、扇子を手三番叟を舞う猿の絵であった。申年に因んだこの趣向を喜んで、私たちは松の内の間中、壁に掛けて目を楽しませたのであった。

一方、八つ年下の叔母は、結婚してから主人と一緒に習い始めた謡の本が全部残してあったのを役立てて、叔父の俳画同様、頼まれた人に教えていたら、こちらも人数が多くなっていまは稽

古日が週に三日になった。夫婦二人で暮して行くだけの財産はもとよりあるにしても、こういう時世だからなるべくつましく過すのがいいに決まっている。趣味を生かしながらそれがいくばくかのお小遣いにもなるとすれば結構なことだ。

この前、四人ですき焼を食べた時も、ささやかな忘年会の締め括りに「猩々」の小謡を教えてくれた。もっとも、こちらは叔母がビールのコップやら小鉢の載っている卓の前で手を打って拍子を取りながらうたってくれるのを、ただ口移しに繰返すだけ。

「老いせぬや」

といえば、老いせぬや。

「くすりの名をも菊の水」

といえば、くすりの名をも菊の水。

「盃も浮かみ出でて友に逢ふぞ嬉しき。この友に逢ふぞ嬉しき」

まだ辿り着きはしたものの、どうも謡をうたったという気持とは程遠い。しまいに叔父が笑い出して、

「調子に乗って、ビール飲んで酔うてしもて。あああ、おかし」

といったが、叔母は相手にしなかった。

私たちが大阪へ出かけたのは、風の無い、よく晴れた日であった。ところが米原を過ぎた頃から天気は悪くなり、やがて伊吹山の見える辺まで来ると、横なぐりに雪が降り出した。それは僅かな間であったが、新大阪駅のホームにおいてみると空気が冷たいのに驚いた。

中之島の、この数年来、馴染になったホテルに入ってから、太地と約束の五時までにはかなり間があった。私は二度目に出した手紙の中で、わざわざ神戸から出向いてくれる彼に礼を述べたあとで、お目にかかってから三十分ばかり雑談をして、それから食堂へ案内するつもりでいますと書いたのは、これまでに何度かの文通はあったというものの、戦争中に別れてから（もし太地が開戦のために早められて十二月の下旬に上本町の学校で行われた卒業式にもし出られたとしたら、その日以来ということになる）初めて会うとなると、いきなり食事というわけにもゆかないと思っただからだ。

約束の時間の三十分前に私たちは九階の部屋を出て、一階のロビーにおりた。いい具合に入口に近く、向い合せに椅子が四つ空いていた。二人はそこに腰をおろした。もうそろそろ五時になるという頃に一人、入って来た。が、それは違った。次にまた一人、硝子越しに影が見えた。頭のかたち、身体つきで太地と分った。

「あれだよ」

少し前から隣りの椅子に移って同じように入口の方を見ていた妻に私はいった。それは当っていた。私は椅子から立ち上って手を挙げた。黒いコートを着て鞆をさげた太地は、いい姿勢で歩いて来た。私は進み寄って声をかけた。二人は挨拶を交した。それから私は妻を引き合せ、わざわざ神戸から出て来て貰った礼をいった。

私たちは向い合って椅子に腰をおろした。濃いグレイに細い縞の入った背広に身を包んだ太地は、学校にいた時分と少しも変らない顔だちで、きちんと分けた髪のもみあげのあたりに僅かに白いものが見えた。

「二月になると空が明るくなるね」

と彼がいった。地下鉄の駅に近い大江橋から来たのか、それともこの間まで勤めていた新聞社のある堂島の方から渡辺橋を渡って来たのか、どちらにしてもつい今しがた、日の落ちたあとの街を通り抜けて来た人とは思えないような言葉であった。

「いま頃の氣候がいちばん好きだな」

ええ、私たちもそうなんですと妻はいったが、着ていたコートは薄いし、マフラーもしていないところを見ると、太地は私たち夫婦のような寒がりではなさそうだ。

「君はちっとも変っていないな」

そういうと、太地はほっとした様子で、

「前はもう少し肥えていたでしょう。あの時分は十七貫あったよ、昔ふうというと」
そういうば、いまより頬がふくらんでいたかも知れない。こちらは十六貫だったから、彼の方

が目方はあったことになる。

「それに柔道なんかやってたしね、田中君なんかと一緒に」

田中君といったのは、クラスでもひと際目立つ体格の持主でありながら、極めて無口な男であった。

「そうか、それは覚えていないな。柔道部に入ってた？」

「いや、入ってはいなかったけど、語部対抗の試合に出て、優勝戦まで行ったことがあるよ。それはまたあとでお話ししましょう」

太地は隣の椅子から鞆を引き寄せて、茶色の包み紙の手土産らしいのを取り出すと、

「これは奥さんに」

といって渡した。

「神戸のお肉ですか。大好きなんです」

「これは佃煮ですけど。好き好きがあるから、少しだけ」

——この牛肉の佃煮が味つけに独特の風味があっておいしかったことを付け加えておかなくてはいけない。八百丑という店の名を私たちはこれで覚えた。

こちらは紙袋から数日前に出版社から届いた短篇集を取り出して、これ、出たところなんだけどといって差出す。署名をしてある見開きの頁を見て、太地はそれほど有難うといった。それから、

「いや、今日はあなたにお目にかかるので、これを」